

## バイロンとポリドリ——ヴァンパイアリズムを中心に——

相浦 玲子

### バイロンとポリドリの大陸への旅の状況

詩人バイロン(George Gordon 6th Lord Byron, 1788-1824)は若くして国内で名声を得るが、醜聞によって国内に留まり難くなり、1816年4月25日に、ヨーロッパ大陸への旅に出発する。これは社交界からの圧力を受けて、自ら課した国外追放といっても過言ではないだろう。このとき彼は28歳であった。前日にはドーヴァー海峡を渡る船の時間待ちに、前世紀の有名な風刺家、チャールズ・チャーチル(Charles Churchill)の墓を見に行こうと、旅の仲間たちに提案し、それを実現させるが、そこで彼は突然、墓守のいる前で墓の上に横たわる。<sup>1</sup>この突拍子もない行為は奇異で、彼のその後の人生を暗示するようでもあった。つまり、バイロンは、これを最後に二度と故国へ帰ることはなく、それは八年後にギリシャで訪れる死への予感ともつながるものであった。バイロンのケンブリッジ大学時代の親友、ホップハウス(John Cam Hobhouse)は1816年4月25日付で次のように記している、“He [=Byron] sometimes talked of returning in a year or so, at others of being longer away, but told me he felt a presentiment that his absence would be long.”<sup>2</sup>ここにはバイロンの運命論者としての一面がよく出ている。さて旅行当日、彼は後ろ髪を引かれるように、なかなか目が覚めず、見送りに来た親友ホップハウスをはじめ一行をやきもきさせたという。船長が、一刻も出航を遅らせることはできないと、いらだっているところによりやく友人に支えられたバイロンが現われる。<sup>3</sup>一行は、バイロンの他、フレッチャー(Fletcher)、ラシュトン(Rushton)、ポリドリ(Dr. Polidori)とスイス人のガイドであった。<sup>4</sup>

こうしてドーヴァー海峡をこえて大陸に渡ったあと、一行はウォータールーの生々しい戦争のあとを見て、ドイツに入る。

### ポリドリについて

ポリドリ(John Polidori, 1795-1821)は、バイロンの侍医として選ばれていたが、まだ若く、大学を卒業したばかりで、21才に過ぎなかった。彼は、両親ともイタリア人の家系で、妹は後にロゼッティー家に嫁し、その子供達はヴィクトリア朝時代に詩人として有名になるロゼッティー兄妹(Dante & Christina Rossetti)で、ポリドリはその伯父にあたることになる。<sup>5</sup>小さい頃から才能のある、利発な少年で、親、特に父親の期待感が強かったようである。彼は寄宿学校にあって、父親と頻繁に自分の将来進むべき方向性について手紙のやりとりをしている。D.L.マクドナルドの手になるポリドリの伝記によると、“Gaetano's [John Polidori's father's] expectations for his son were clearly as high

as ever, and now they were assuming a more definite forms...”であり、ポリドリは伝記に収められた父に宛てた次の手紙の中でつぎのように述べている、

The observation you [=Gaetano] made upon my genius gave me much pleasure, and I hope that by a close attention to my studies I shall be able to answer the favourable expectations you have formed of me. I quite agree with you in preferring a learned profession to any other.<sup>6</sup>

このことから、父Gaetanoの息子に対する期待がどれだけ強かったか、また息子が自分のほんとうの意志を表すことをためらい、どれほど従順に父親の希望に沿うようにと努力しているかが窺える。彼の父は医者で、八人兄妹の頭の長男であるこの息子にも医者になってほしいと希望する。<sup>7</sup> 父親が希望したエディンバラ大学での医学の勉強は、最初、ポリドリにとってあまり歓迎すべきもののようには思われなかった。ポリドリの伝記からは、次にあげるように、十代のポリドリと父親のあいだで手紙による意見交換がかなりあったことが窺えるが、結局は父親の愛と歓心を買いたい一心でポリドリが親の言いなりになっていく様子が浮かび上がってくる、

He submits entirely, however, to his father's plan for him, and apologizes for having suggested anything different. His father's 'kind letter,' he says, 'has relieved me from a great deal of anxiety of knowing how you had determined as to my state of life. If I had proposed a different state, it was only because you asked me my opinion and I told you sincerely [*stat.*]. But believe me, Dear Father, I never meant to go contrary to your advice in this affair or to be found wanting in the duty of a Son. I had an inclination to an ecclesiastical state, but I never meant to put myself under an obligation, till I was old enough in the opinion of my father to judge whether I had a vocation. I had not told my opinion to Mr March nor scarcely [*stat.*] to any body else, because as I told you in my letter I thought I was too young to judge for myself. And on this account I had been discouraged from writing on it before.'<sup>8</sup>

このように父親の権威が強く、結局、ポリドリは父の意思に従ってエディンバラ大学へ進むことになる。当時 エディンバラは、ヨーロッパおよび英語圏で屈指の医学の研究の中心地であった。ただそのために人気が高まりすぎ、学生数が多くなりすぎたきらいはあった。もともと好きでエディンバラ大学へ来たわけでもないポリドリにとって、慣れ親しんだロンドンから遠く離れて、文化も異なるスコットランドの医学生生活は楽しめず、孤

独であったようだ。そこでイタリア人の血に目覚め、学業半ばにしてイタリアに渡って、当時まだ統一されていなかった「祖国」のために働きたいと言い出す始末であった。<sup>9</sup> 前述のD.L.マクドナルドによると、ポリドリには、「イタリア」のために闘う二つの理由があった。つまりそれは意外にも、“his fearful love for and rebellion against his father” というのである。<sup>10</sup> 彼の父親はもはやイタリア人としてのアイデンティティーを持たず、突然、自我を主張し始めた息子のことを理解するどころか、彼のことを“a madman fit for a strait waistcoat”と呼んでいる。<sup>11</sup> しかし1815年7月、ポリドリは一時は辞めたいと思った医学であったが、ひたすら父親に見捨てられたくないという気持ちから学業に戻り、当時は半年かかって受けなければならない、冗長に続くいくつもの卒業試験をこなし、卒業にこぎつけた。<sup>12</sup> しかも、試験前かなりな緊張感で神経質になり、妹のフランセスに弱音をはいたりしていたが、結果的には試験官が賞賛するほど見事な成績を残した。ポリドリ自身の言葉によると、試験官である教授は彼のところへやって来て次のように言ったという、“not only passed but passed with the utmost satisfaction to all the professors and upon my going out Dr Monro complimented me upon my extraordinary clear head.”<sup>13</sup> また、卒業論文は、“written as lucidly as possible, and with the greatest possible ingenuity”<sup>14</sup> というほど優秀なものであったらしい。しかし、ロンドンではスコットランドと法律が異なり、ポリドリは26歳になってイングランドの試験にもう一度パスするまで開業できないという事情があった。<sup>15</sup>

さて卒業して間もなくバイロンの侍医として雇われて大陸への旅に同行することになるが、ポリドリはもともと文学に興味があったので、双方にとって都合のいい、うってつけの職を得たように思われた。しかし年も若く、人格的にややいびつなものを持っていたポリドリは、彼より少し年長で人生の上でのいろいろな問題をかかえていた詩人、バイロンのお相手をするには無理があったようである。先に見たように、父親との葛藤から脱し切れていず、雇われる限りは仕方がないことなのだが、気難しく、当然のことながら自分に対して権威(authority)を持つバイロンの存在に耐えられなくなっていったのかもしれない。しかも相性の問題というだけでなく、おしゃべりで、でしゃばりなポリドリを雇うことにホップハウスは、最初から特に強く反対していた。しかしバイロンは、まわりの人の反対にもかかわらず、結局、ポリドリを旅行に連れて行く。バイロンが何らかの意味で、この青年に興味を抱いたことは確かである。ポリドリは、バイロンの本をいつも出版していたマリー(John Murray)から、特に旅行中のバイロンの行状を中心にした旅行記を書くことをすすめられて承諾し、500ポンドを与えられた。<sup>16</sup> しかし、ポリドリが妹に宛てた次の一節 “Some time you will either see my Journal in writing or print--Murray having offered me 500 guineas for it through Lord Byron”<sup>17</sup> を読むと、バイロンもこのことを承知していたらしいことがわかる。5月27日にはバイロンの一行は、先に到着していたシェリーの一行に、ジュネーヴで出会う。<sup>18</sup>

ポリドリは、先に見たようにかなり話し好きで、場所をわきまえず人の話に立ち入ってくるというような人物であったようだ。彼はスイスで合流してきたパーシー・B.シェリーらの一行に対して、主人バイロンをとられるような気がして嫉妬していたといい、また彼らもポリドリをあまり相手にしていなかった。<sup>19</sup>しかしポリドリは機会をとらえて、シェリーと、生命観のようなことについて議論したことが、メアリ・シェリーの日記に記されている。<sup>20</sup>それらのことを考慮に入れると、彼は、エディンバラ大学での医学生としての経験についても、旅の一行、特にバイロンと話していた可能性は大きい。ポリドリがエディンバラにいたころの話題として、当時、巨大化していたエディンバラ大学の医学部で、日常茶飯事のように行われていた、解剖学のための不法なやり方での遺体の確保があった。ポリドリの伝記は次のように述べている、

As a doctor, Polidori would have had something to say about the principle of life; as a graduate of Edinburgh, where grave-robbing (or, to use the suggestive euphemism then current, 'resurrectioning') was the standard means of providing subjects for anatomy lectures, he may have had something to say about the resuscitation of the dead.<sup>21</sup>

ポリドリは科学に携わる人間として、人間の死を冷静に見ることには少しは慣れていたはずであるが、彼の『ヴァンパイア』がそれをふまえているかどうかは疑問である。

彼の父親はカトリックで、男女八人の子供のうち、男の子はカトリック、女の子は母親の信奉するアングリカン（英国国教会）によってしつけられることが、両親の結婚の時から決められていたという。<sup>22</sup>このような家庭環境の中で、ポリドリは宗教について敏感に察知する環境に育ったといえよう。彼は、兄妹のうちの最年長者で、親の期待が大きかったことは前述のとおりだが、カトリックの信仰のもとに育てられたはずの彼が後に、教会が禁じている自殺をするに至るには、余程の動機があつてのことであろう。一つの動機としては、健康が勝れず、仕事にも馴染めず、ギャンブルで大きな負債を抱えながら、父親には借金を頼めなかったポリドリの性格の弱さが考えられる。父親は、息子の自殺を信じようとはしなかったという。<sup>23</sup>

#### ヴァンパイアリズム(Vampirism)<sup>24</sup>の起りと文学への影響

さてバイロンは、いつ、どのようにvampirismに興味を持つようになったのかを考えてみたい。英国におけるvampirismの流行はバイロンが大陸へ行く前からあったようで、バイロンがこの概念を初めて導入したという訳ではない。しかし、それではなぜ、バイロンがこの流行に興味を持ったばかりか、自らもvampirism的なものを詩の中に登場させるようになったのか、そしてまた、さかのぼって vampirism のそもそもの起りは何であっ



たのか、大陸におけるvampirismの流行はどのようなであったのか、というあたりの事情をこの小論で考察してゆきたい。

まずバイロンやその他の多くの英国の詩人たちの関心を引き起こしたvampirismとは一体何なのか？ 今日では想像もつかないが、当時、vampirismはインテリの中に広くゆきわたったテーマであつたらしく、ロマン派の主だった詩人の作品の中には必ずといっていいほど現われているものである。そのような状況を生み出した背景を遡って考えると、どうしても大陸へ目を移さなければならない。ここで少し、vampireの歴史を追ってみよう。

今日ではvampireはDraculaとよく混同されるが、Draculaはvampireであつたとしてもvampireは必ずしもDraculaではない。Vampireの概念はDraculaの概念よりもはるかに広義である。この混乱は主にイギリスのブラム・ストーカー(Bram Stoker)が1897年に『ドラキュラ』(Dracula)を出版してから起こったことであり、彼は今世紀のハリウッド映画の作り上げたヴァンパイア像には大きな貢献をしたといえる。しかし、それではそれより前の時代のロマン派やさらにそれ以前のvampirismは、どこから出てきたのだろうか。Bram Stokerは、Draculaを書くまで、6年間という歳月をその研究に費やしたといわれている。<sup>25</sup> そういう意味では、彼の作品Draculaは、相当な研究に基づいているのでヴァンパイアに伴う歴史的・文化的背景の幾ばくかのイメージは、この作品から借りることができる。

ところで、vampireという発想は、もともと東洋にあるといわれている。Vampireは、スラヴ系の語源を持ち、スラヴ系の諸語、ロシア語、ポーランド語、チェコ語、セルビア語、ブルガリア語などに見られる。特にその中でも東洋のファン族を出自としたハンガリーのマジャール(Magyar)の“vampir”からきていたといわれ、それは、“blood-sucker”に語源を持つともされている。『オックスフォード英語辞典』(O.E.D.)によっても、いくつかの可能性があげられている以外は、定かな意味は記録されていない。<sup>26</sup> ただ英語の中にはいつてきたのは1734年が初出とされ、それほど古い時代ではないようである。この1734年に出ている記述を以下に挙げると、“These Vampyres are supposed to be the Bodies of deceased Persons, animated by evil Spirits, which come out of the Graves, in the Night-time, suck the Blood of many of the Living, and thereby destroy them.” というようにいわゆるvampireの原形らしいものが見られる。

Vampireの別名のnosferatはplague carrierという意味で、これが中世の何らかの疫病からの連想であることをうかがわせる。<sup>27</sup> すなわち、人が突然死んだとして、そのあと続いて数人が亡くなったとすると、それは最初に死んだ人がそうさせているのだ、ということになるわけである。ルーマニアのあたりでは伝染病はしばしば吸血鬼の仕業とされてきた。黒死病やインフルエンザはくしゃみによって悪霊をうつされると信じられ、くしゃみをした人に“bless you”という習慣ができたのもそのためと言われている。<sup>28</sup>

Vampireは血液と深く関わりがある。人は血液なしには生きられない。血液はいわば、lifeとも同一視されうる。置き換えるなら、血を吸うことは生命を吸うことともいえる。キリ

スト教の聖体拝領や聖餐式(Holy Communion/ Eucharist)などといわれているものには、キリストの受難の象徴的意味合いもさることながら、まさに信仰者自身の「再生」(復活)への願いがこめられている。(聖体拝領や聖餐式にでてくる典礼、“Who so eateth my flesh and drinkth my blood....” や、また、“For the blood is the life” といった儀式上の文言。)しかしvampireはその暗いイメージからしばしば反キリスト教的なものと思われるに至る。

カトリック教会には1490年代に、人々の中に潜む悪魔を見出しそれを追及するテキストとして、二人のドミニコ派の修道僧によって編纂された、後世に悪名高い*Malleus Maleficarum*という書がある。これは魔女の定義づけなど、その特異な内容にもかかわらず、教皇インノケンティウスVIII世(Pope Innocent VIII)を皮切りに、200年ものあいだカトリックの公式権威の一つとして利用された。<sup>29</sup>

Vampireと宗教は、いくつかの表面上のつながりを除いては、一見すぐには結び付かない。しかし、ここではvampirismと宗教との関係にまず焦点をあててみたい。ドラキュラ伝説を生み出したといわれるトランシルヴァニア地方とは、どのようなところなのか。現在ルーマニアといわれている国はかつて、三つの地方に分かれていて、これらの地方を支配している宗教は、ギリシャ正教(Greek Orthodox)であった。現在もルーマニアの大多数の国民がそうである。三つの地方とは、すなわち、西にトランシルヴァニア、北東にモルダヴィア、南東には現在の首都ブカレストを擁するワラキアと呼ばれる地方(古くからこのあたりの中心地)があり、それらを南からイスラムのオスマン帝国、北からはローマン・カトリックの神聖ローマ帝国が取り巻くという宗教的状况があった。



## ヴラド・ツェペシュ

上記の三地方、トランシルヴァニア、モルダヴィア、ワラキアはもともと、それぞれ半分独立した形の首長国のような政体をなしていた。その中で、1430年頃、生まれたとされているヴラド・ツェペシュ(Vlad Tepes)はヴラド・ドラクール(Vlad Dracul=Vlad the Dragon)と呼ばれるようになる。彼は、そのような「国」の長として、ワラキアを治めるようになる。ドラクールはドラゴンと同語源で、固有名詞ではなく称号であり、Vlad Tepesの父が最初に、神聖ローマ帝国の法皇ジギスムント(Emperor Sigismund)によって与えられたものである。大国に囲まれた小国の運命にあって、もともと多数のギリシャ正教の人口を抱えるワラキアは、カトリックとイスラムの両方の勢力に挟まれ右往左往する。ツェペシュの父が、1447年、殺害されると、息子ヴラド・ツェペシュの世になる。1453年、コンスタンチノーブルがトルコの手落ち、キリスト教勢力のヨーロッパに恐慌をきたす。ツェペシュは、父Draculの息子として“Dracula”(son of the Dragon)とあだなされるようになった。彼は、トルコの侵入に対してあくまでも闘う姿勢を貫いた。しかし後に一時、ハンガリーに囚われの身になったツェペシュは、自由を得るために、ギリシャ正教を棄てて、ローマン・カトリックに改宗したともいわれている。<sup>30</sup>1476年に再びワラキアを治めたが、数週間でトルコとの戦いの最中に戦死した。別の情報によると、ドラキュラは、トルコ軍に混じって孤軍奮闘しているときに、誤って味方に殺されたという説もある。<sup>31</sup>

いずれにせよツェペシュに対する評価は、徹底的に分かれるが、彼の生前の「功績」は、当然、残虐な人間の串刺しの事実も含めて、吟遊詩人によって語られ、徐々にヨーロッパ中に広がっていったとわれている。<sup>32</sup>ドラキュラの死後、ワラキアは、トルコに占領された。<sup>33</sup>

史実の「ドラキュラ」の話は、すでに1558年に英国に到達している。<sup>34</sup>しかし、ヨーロッパの状況は刻々と激しい変化をとげ、ツェペシュのことは、やがて人々の記憶から消えていく。ヨーロッパの中心が、西方化したことにもよるが、ドラキュラやヴァンパイア伝説の研究家、レザデイルによると、彼に再び陽があたるのは、19世紀後半に前述のブラム・ストーカーが『ドラキュラ』を出版してからのことである。<sup>35</sup>

## ギリシャ正教とローマン・カトリック

ギリシャ正教は、ヨーロッパのvampireのfolkloreに大きな影響を与えたと言われている。というのは、“...excommunicants and other heretics would not decompose in their unhallowed graves.”<sup>36</sup>という信仰があるからで、つまり人々の死体は何らかの事情で、腐って土に還って行かないとき、これらの疑いをかけられた。ギリシャ正教の信仰によると呪いにかかったものの死体は、大地に受け入れられないので、いつまでもそのままの姿でいなければならない。<sup>37</sup>不死者も吸血鬼も心臓に杭を打ち込む(打ち込んだときに、身体の中の空気が出ていくので、まるで生きている人の叫びのような音をたてるといわれている)か、焼き尽くすしか滅ぼす方法はない。<sup>38</sup>それに対して、ローマン・カトリックは逆で、

死体が腐らないのは、聖人の印であると受け止めていた。ギリシャ正教でも、聖人の身体は香りが漂い、顔が崩れず、死体が腐らないというところまでは同じであるが、悪人のものは、黒く、体内にガスが発生するので膨張し、悪臭がするが通常のように腐らず何よりも「死なない」、というものだ。それぞれの教会は、境界を接するあたりの住民を巻き込んでお互いの非難をエスカレートさせていく。<sup>39</sup>

「自殺」は、当然のことながら、神に委ねられているはずの生死の決定権を人間が勝手に蹂躪するものとして、悪とみなされてきた。教会は、人々がこの世の苦難から逃れようとして、あの世に憧れる人々に、自殺をすると天国へは行けない、と警告を与え、自殺の危険性を吹聴した。そのような状況の中で、人々に自殺を思いとどまらせるために、vampireの恐怖を行き渡らせた。自殺を願望する者の願いは、この世からの忘却、あるいは、この世の忘却であるはずなのだが、自殺をするとそれが得られなくなるという。レザデイルによると、“...(that) potential suicides would not attain their objective--oblivion from this world followed by everlasting peace--but, ironically the torment of everlasting life as a vampire. The penalty for suicide would be immortality.”<sup>40</sup>である。つまり人はしばしば「不死」を求めたがるものであるが、本来、「死すべき」(mortal) 運命にあるはずで、しかも「死」の時期の決定権は与えられていない。そしてその原則が「自殺」ということで崩されると、宗教の枠からはみ出してしまう。そこで、教会の墓地には葬らないという「見せしめ」をすることになったのであろう。そして自殺者の遺体は四つ辻——つまり十字架のまん中——に葬るという習慣もでてきたようだ。そこには二つの意味合いがあって、

一つ目は、 reminding the restless spirit of the sign of the cross

二つ目は、 confusing the risen suicide in his wanderings

ということである。

イギリスでは、自殺者の遺体の心臓に杭をうってもよい、とする法を1823年になってはじめて廃止した。つまりそれまでそのようなことがまかり通っていたということでもある。

Vampire、すなわち “undead” とか “Living dead” という言葉におきかえられるものは、最初、貧しくて、迷信深い人々によって恐れられていて、vampireの行動は、人々の生活様式や社会習慣を色濃く反映していた。そういう意味では伝説は、スマートな貴族というイギリスでできあがった新しいドラキュラのイメージとはまったく異なるところから生まれ、土着の、民話的要素として、この地方には残っている。もともとのvampireは、痩せこけて、やつれて目の落ちくぼんだ農民というのか、普通だった。こうもりや満月の夜との関連づけもイギリスに渡ってからの、比較的新しいものと思われる。

やがて、1720年代から1730年代になると、Ottoman Empire (オスマン・トルコ)の勢力にかげりが見え始め、Habsburg Catholics (神聖ローマ帝国)がその間隙を占拠し始める。そうになると、キリスト教の中の、西方と東方の両教会のもっと激しい綱引きが始まる

わけである。お互いに、相手の領土の土に触れると、永遠の憩いが得られなくなるという応酬が始まる。カルパチア山脈はそれぞれの地方の分水嶺にあたり、この麓から、それぞれの宗教がぶつかり合うことによって生じる軋轢によって、ヴァンパイア出現の素地ができていく。<sup>41</sup>この地方の農民たちは、トルコのイスラム勢力と、ローマン・カトリックの勢力に次々とさらされ、めまぐるしい宗教の渦のなかにはいりこんでしまう。ずっと後になって、vampireの目撃などの報告は、この地方に集中していたことがわかる。

#### Vampirismの伝播

このような状況のなかで、ヴァンパイアの集団ヒステリー的パラノイアは、この地方にとどまらず、ヨーロッパの中部・西部の一部に広がっていく。レザデイルはむしろプロテスタントが多数を占める北西部のヨーロッパでは、ヴァンパイアをそのまま受け入れずに、「魔女」(witchcraft)という概念を作り上げたのではないかと考える。<sup>42</sup>宗教改革を経てドイツは、このようなパラノイアの渦中にはなかった。当時ドイツはローマの直接の支配下にもなく、啓蒙主義の時代にあつて、理性を重んじる風潮の中にあつた。それだけに、いったんvampireの概念がはいつてくると、それを学問的に深刻にうけとめる。そのころからドイツの多くの大学から、次々に研究論文が発表され、それがイギリスに渡ってくる。そのようにして1730年には、イギリスでは“vampire”という語が初めて現われる。<sup>43</sup>これは バイロンの時代からみるとおよそ100年近く前のことである。

宗教改革の波を経てローマン・カトリックから宗教的に独立していたイギリスも当時は、理性の時代であつたので、vampireが熱狂的に迎えられるようなことはなかったし、何よりも、民衆の間に民間伝承として入ってきたというより、知識人の階層からはいつてきた概念であつたので、あまり集団ヒステリーの原因とはならなかったようである。それゆえ、イギリスには、vampire loreのようなものは皆無とは言えないにしてもあまりなく、生活の中から編み出されていくfolklore(民話)というより、むしろ純文学という知的な形になって現われた。

#### 文学に現れたVampirism

ゴシック趣味が出だし、世紀末(18世紀末)になると、もはやトランシルヴァニア地方の農民の恐怖を超越して、「怖いもの見たさ」の好奇心がたかまってくる。ドイツではゲーテが、『コリントの花嫁』(英訳のタイトルは“The Bride of Corinth”)というvampirismの現れる作品を発表しているが、多くのドイツの文学のなかに vampirism が現われ、当時の文化的状況としてイギリスの知識人がその影響を強く受けたことは想像に難くない。特に、ドイツ観念論哲学やドイツ・ロマン派の作品にいち早く触れたコールリッジは、その最初の頃の例になるだろう。彼は、1797年にvampirism の片鱗の見られる*Christabel*の第一巻を書いているが、同じ年、Southeyは“Thalaba the Destroyer,”翌年1798(?)

には“The Old Woman of Berkeley”において、vampirismを早くも出現させている。Walter Scottも“Rokeby”(1813)があり、Shelleyは“Cenci”(1820)、Keatsは“Lamia”(1820)、“La Belle Dame Sans Merci”(1848)という風にそれぞれがある種のvampirismのテーマを含んだ詩を発表している。<sup>44</sup>しかしBram Stokerの*Dracula*というvampireの総集編であり決定版のようなものが出版されるのはずっと後の1897年のことである。それまでにすでに多くのvampire関連の作品が出され、ロマン派以後には、Emily Bronteの『嵐が丘』*Wuthering Heights*(1847)のヒースクリフは、物語の後半、復讐の鬼と化し、「顔面蒼白」、「ほとんど何も食べない」、「この世のものならぬ形相」などの様子が描かれており、当時の人々が読むと、すぐにvampirismへの暗示やほのめかし(allusion)があることがわかる、というようにvampirismは文学の伝統の一つとなっていた。

### バイロンとVampirism

バイロンは、当時、詩人としての名声のほか、ヴァンパイアの名を世に広めた有名人としても知られていた。1812年の3月、『チャイルド・ハロルド』第一巻、第二巻で「一夜にして」文名をあげるが、その評判を得た翌年に、*The Giaour*を発表している。この詩の中に次のような箇所がある、

“But first, on earth as Vampire sent,/ Thy corse shall from its tomb be rent:/ Then ghastly haunt thy native place,/ And suck the blood of all thy race;/ There from thy daughter, sister, wife,/ At midnight drain the stream of life;/ Yet loathe the banquet which perforce/ Must feed thy livid living corse:/ Thy victims ere they yet expire/ Shall know the demon for their sire,/ As cursing thee, thou cursing them,/ Thy flowers are wither'd on the stem.” (“The Giaour,” ll. 755-766)

というもので、ここにはO.E.D.の“vampyre”の項目のなかにも示されているほど特徴的なvampireの描写がある。バイロンにとってはこれがvampirismについてふれた最初のもつと言えよう。出版人John MurrayのところでSir Walter Scottと会い、コールリッジ(Coleridge)の*Christabel*の一節を聴いていた。<sup>45</sup>コールリッジはバイロンより年上で先輩詩人であった。最初、バイロンはコールリッジのことを高く評価していなかったが、このころになって(おそらく自分の名声が確立してから)、コールリッジを見直し、経済的に困っている彼を助けたいと思うようになったようで、Murrayにコールリッジの作品を出版するように頼み、それは1816年に出版の運びとなった。<sup>46</sup>

そのようにすでに、二度目の大陸旅行へ出る以前からバイロンは、かなりvampireに関心があり、また文学界の中でもすでにゆきわたっていて、特にめずらしい題材ではなかったようである。ただ後に現れてくるストーリーのように吸血鬼がつぎつぎ別の吸血鬼を生

むというようなものではなく、人を恐怖に陥れて精神的な打撃を与える、この世のものならぬ存在として描かれることが多かった。*The Giaour* 出版の約3年後、短期間に結婚と別居を経験し、近親相姦の非難的になり、今度は「一夜のうちに悪名が高く」なったような状況が生じ、二度目のヨーロッパ大陸旅行に出る。“He was exiled from drawing rooms, spat upon in the streets, and cast in the role of social pariah, almost a vampire among men.” / “Byron was genuinely shocked.”<sup>47</sup> しばらくスイスに滞在するが、そこで先にも述べたように、シェリーの一行、すなわち、パーシー・ビッシュ・シェリー、メアリ・ゴドウィン(後のシェリー夫人)、メアリの義姉クレア・クレアモントである。バイロンの滞在していたDiodati荘で1816年6月中旬、これらのメンバーはゴシック・ロマンスのドイツ語からの翻訳を聞いたり、イギリスの最新の怪奇的なストーリーや詩の情報を交換しあっていたようであるが、ある夜、幽霊ばなしを各自がつくることになり、バイロンは、vampireの断片的なストーリーを披露した。また、メアリ・シェリーの記録によると、バイロンは、出版以前に原稿を読んで知っていたコールリッジの*Christabel*の一部をその場に居合わせた人たちに聞かせたことがあったが、パーシー・ビッシュ・シェリーはそのストーリーの迫力に恐怖を感じて、部屋を飛び出してしまったと述べている。<sup>48</sup>

この一夜の会合の中から後に大きな成果があったのは、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』であったが、もう一つは、ポリドリが、このときのバイロンの話にヒントを得て書いた*The Vampyre*であった。しかしこの*The Vampyre*は広く人々に受け入れられ、賞賛されたにも拘らず、つまずきの多いものであった。一つの大きな過ちは、これがまず雑誌にバイロンの名前で発表され、バイロンが怒って何度も自作ではないと抗議したというものであった。その後、本として出版されたときには、匿名にされたが、バイロンに関係があること、バイロンが著者でありそうなことはもはや取り消すことが不可能になっていた。<sup>49</sup> ポリドリは1821年に若くして自殺するが、なぜ彼がバイロンを陥れるようなことをしたのかは定かでない。有名人バイロンの名を借りれば売れ行きも良くなる、というような計算が働いていたのかもしれないし、バイロンをよく思わず、何らかの復讐をしたかったのかも知れない。あるいは、彼の思いつきの、悪い冗談であったのかもしれない。ポリドリはあのレマン湖畔の集いの折に自分でも“ghost story”を発表しているが、稚拙でありあまりできないいいものではなく、バイロンの“The Vampyre”が一番洗練されていたものだったという。<sup>50</sup>

バイロンが1816年6月17日に語ったとされる、ヴァンパイア話の現存する“Fragment”(of a Novel)について考察を加えたい。まず、この作品はバイロンとポリドリという二人を彷彿とさせる登場人物なしには成り立たない。しかも、バイロンは、このストーリーでは、他の多くの詩に見られるように自己を一人称の主人公と重なるものとして描いてはいないことが注目される。つまり、このストーリーにおける“I”は、バイロン自身ではなく、ポリドリと解釈することができるのである。この“Fragment”のさまざまな描写は、

“Augustus Darvell” と “I” の関係が現実のバイロンとポリドリの関係と並行するかたちであることに気づかせてくれる。ポリドリに関してあてはまるさまざまな事例を “Fragment” の中から次にあげてみる、

I set out, accompanied by a friend, whom I shall designate by the name of Augustus Darvell. He was a few years my elder, and a man of considerable fortune and ancient family: advantages which an extensive capacity prevented him alike from undervaluing and overrating.<sup>51</sup>

この一節にあるように、ポリドリはバイロンより年下（現実には七歳年下）で、大陸への旅に出かけることになるということ、“fortune” 部分では現実と合わないもののバイロンの両親の家系を遡ると共に、古い家系を誇るという点で合致している。バイロンは、このストーリーを明らかに、ポリドリの立場から描こうとしていることがわかる。バイロンは、ポリドリならぬ “I” に次のように言わしめている、

“Some peculiar circumstances in his private history had rendered him to me an object of attention, of interest, and even of regard, which neither the reserve of his manners, nor occasional indications of an inquietude at times nearly approaching to alienation of mind, could extinguish.”<sup>52</sup>

つまり、バイロンは時代の好奇の対象であり、常に人々から見られることを意識していたので、ポリドリがさまざまな理由からも興味や好奇心を持って観察していることを十分承知していたはずである。ポリドリが世間知らずでかなり純情であったことは、彼の日記から知ることができよう。<sup>53</sup> “Fragment” にあるようにポリドリが “I was yet young in life...but my intimacy with him [Darvell] was of a recent date....” とあるのは事実と一致している。続く、同じ学校で教育を受け云々は事実と異なるが、ポリドリが大陸の血を受けつぎ、スコットランドで学んだという点では、スコットランドの血を引き、またそこで育てられたことのあるバイロンにとっては、まんざら異質ではなかっただろう。そしてポリドリがバイロンを羨望の目で見ただであろうことをバイロンは見抜いていた。それは “...his [Darvell's] progress...had preceded mine, and he had been deeply initiated into what is called the world, while I was yet in my novitiate.” という箇所である。このあたりには、世間に詩人としての名を確立してしまっていたバイロンと、世間知らずで好奇心が強く、しかし、これから世の中でひと旗あげたいと願っているポリドリの姿が浮き彫りになって現れている。

この “Fragment” が『ヴァンパイア』の断片であるならば、バイロンは自らを主人公の



ヴァンパイアと思しき人物の位置に置いたことになる。世間知らずの普通人のポリドリには、理解しきれない過去と現在の問題をDarvellがかかえていることもほのめかされ、“I”はDarvellの知己は得るが、「友情」(friendship)は得られないことがわかった、と述べてさせている。バイロンがポリドリらを伴って大陸への旅に出た後、わずか二ヶ月たらずのうちにバイロンがこのような述べていることは興味深い。前述のようにポリドリは、シェリーの一行がスイス滞在中のバイロンにとって大きな存在となったことに対して、「のけ者」にされたような挫折感を味わい、シェリーに対して強い嫉妬を感じていたと言われている。シェリーには、ささいなことで決闘を申し込み、射撃の巧みなバイロンがシェリーに代わって相手をすると言いついたことから、ようやく申し出を引っ込めたといわれているくらいである。ポリドリを身近に見ていたメアリ・シェリーはつぎのように語ったと伝えられている、“...Polidori had become jealous of the growing intimacy of his noble patron [Byron] with Shelley....”<sup>54</sup>

バイロンは、“Fragment”の語り手“I”に次のように言わしめている、“...it was difficult to define the nature of what was working within him [Darvell]; and the expressions of his features would vary so rapidly, though slightly, that it was useless to trace them to their sources.”つまりバイロンは、ポリドリには、とても彼の内面など理解しきれないと考えていたといえる。これに続く文の中で、“It was evident that he was a prey to some cureless disquiet [Underline Mine]; but whether it arose from ambition, love, remorse, grief, from one or all of these, or merely from a morbid temperament akin to disease, I could not discover.”バイロンは、“cureless disquiet”という言葉で、自らの悩みを告白しているともみられる。というのは、“It was evident”というように、誰の目にも明らかであることを認めているからである。ここにあげられている“ambition”は現実のこの時期のバイロンにはあてはまらないが、前回の大陸旅行や、上院議会での演説など意気揚々としていた時期はまぎれもなく存在していたはずである。“Love, remorse, grief”に至っては、バイロンの当時の心境とほとんど重なる悩みであったとみて差し支えないだろう。バイロンは、ポリドリと思しき“I”に第三者として自分を見させて、他人の目から見た自己の姿を描かせている。

ポリドリは、旅の途中からバイロンから冷たくあしらわれると感じるようになるが、それもバイロンは、承知していたはずであり、“My advances were received with sufficient coldness: but I was young, and not easily discouraged....”は、まさにそのことをよく表している。しかし、このあと、少しは共通の部分が見つかりDarvellとの「友情」とも言える感情の芽生えを肯定している。ここからは推測の域だが、バイロンは、シェリーの一行と親密になる前には、ある程度、ポリドリと仲良くしたいという気持があったのではないだろうか。彼のポリドリの『ヴァンパイア』で、ポリドリがほぼバイロンと思しき人物を主人公に、全くの悪人に仕立て上げていることから考えると、バイロンの

“Fragment”では“I”に対して、ほとんど作者の悪意は認められない。

“Darvell had already travelled extensively....”もやはり、バイロンの第一次大陸旅行を考え合わせるとバイロンが行なった過去の事実に基づいており、今回の旅ではまだ訪問が成し遂げられていない国々についての言及があるところからも、バイロンが、自分をDarvellと重ねていたことは、疑う余地がないであろう。短い“Fragment”の中に現れてくる地名には“Smyrna,” “Ephesus and Sardis”などがあるが、Smyrnaはバイロンが『チャイルド・ハロルド』を書き終えたといわれているところで<sup>55</sup>これらの土地へは、ホップハウスと以前に旅行していることがわかっている。<sup>56</sup>

バイロンのこれらの地に関するDarvellの描写は“I”という語り手に姿を借りながら、バイロン自身が自分の姿をできる限り客観的に、第三者的に描こうとしていて、それは次の“there appeared to be an oppression on his [Darvell’s] mind....”などのようなところに表われている。“Fragment”のなかに「トルコ(風)の墓地」(“Turkish cemetery”)が登場し、ここで主人公Darvellが突然、病気で旅を中断して休むことになる。“I”は、Darvellの様子を見て、“this ‘city of the dead’ appeared to be the sole refuge of my unfortunate friend, who seemed on the verge of becoming the last of its inhabitants.”と言っている。この発言の裏には、バイロンが前回、ホップハウスと大陸旅行した際の恐怖の経験があると考えられてもよいのではないだろうか。以下に掲げるホップハウスの日記によると、このときの光景が、かなり“Fragment”に反映していることが理解できよう、

I [=Hobhouse] now learnt from him [Byron, who arrived at three in the morning] that they had lost their way from the commencement of the storm, when not above three miles from the village; and that, after wandering up and down in total ignorance of their position, they had, at last, stopped near some Turkish tombstones and a torrent, which they saw by the flashes of lightning. They had been thus exposed for nine hours; and the guides, so far from assisting them, only augmented the confusion, by running away, after being threatened with death by George the dragoman, who, in an agony of rage and fear, and without giving any warning, fired off both his pistols, and drew from the English servant [Fletcher] an involuntary scream of horror, for he fancied they were beset by robbers.<sup>57</sup>

ここからは、バイロンが実際に見たトルコの墓地のうらさびれた様子が伝わってくる。Darvellは、土地の人間が人っ子一人見当たらないこの異国の地で病に倒れ、水を欲しがらるが、水の在り処を探すことすら困難であろうと困惑する“I”に向かって、意外にもDarvell自身が井戸の在り処を教える。いぶかしく思う“I”に対して、Darvellは、かつてここを訪れたことがあると言う。“I”は当然、どうしてそれを以前に言わなかったのか、

と尋ねるがそれに対する返事はかえってこない。ここでは、あたかもバイロンとポリドリの関係のように、Darvellと“I”とのコミュニケーションの欠如が露呈している。“I”はDarvellが回復するよう願うが、Darvellは“This is the end of my journey, and of my life”という。そのあとDarvellは、“I”に、これからする約束を守る事を誓わせて、アーサー王の伝説による王の最期の場面のやりとりを彷彿とさせるかのように、自分の指輪を定められた時に、定められた場所、即ち、塩水の泉に投げ入れるようにと“I”に言い付ける。

そのとき“I”は、その日が定めの日であることに気づく。また、“a stork, with a snake in her beak”が彼らの近くにとまっていることに気づく。このコウノトリは飛び立っては元のところへ帰ってくる、という描写があり、Darvellは、死んだらこの鳥のとまっている木のところに自分を埋めるようにと頼む。まもなく息を引きとったDarvellの顔を見て“I”は驚く。それは、顔がほとんど真っ黒になっていたからである。またDarvellの墓を掘るためにトルコ風の“ataghan” (yataghan)と呼ばれる刀が使われたとあるが、これに関しては、前回の大陸旅行のときに、バイロンは、次のような事を目撃されたという記録が残っている、

July 14-17, 1810: Anonymous [Reported by Thomas Moore.]

Perceiving, as he [=Byron] walked the deck, a small yataghan, or Turkish dagger, on one of the benches, he took it up, unsheathed it, and, having stood for a few moments contemplating the blade, was heard to say, an under voice, “I should like to know how a person feels after committing a murder.”<sup>58</sup>

ポリドリの“The Vampyre”でも、トルコ風のナイフが登場する、“There were several daggers and ataghans....”<sup>59</sup>そしてこのナイフは、バイロンによる作品とポリドリによるものに共通する大きな類似的特徴の一つとみなすことができる。ナイフは両作品において鍵のような役割を担い、特にポリドリは、このモチーフを発展させて用いている。

さて、Darvellの指示通りに事が運ばれて、Darvellは地面に埋められる、“...the body was rapidly altering...the earth easily gave way, having already received some Mahometan tenant”とあり、これはバイロンが先に述べたようなヴァンパイアと宗教のあいだの何らかの関係についてある程度知っていたことを窺い知ることができる数少ない一節となっている。だが現存しているバイロンのFragmentは、そのあと途絶えてしまう。

バイロンの考えたvampireの主人公は、Augustus Darvellという「大学出」である。(先ほど見た、本来のトランシルヴァニア地方のvampireの主体が農民であったことを考えると大きく変容している。) Augustusは、バイロンの異母姉Augustaの男性形名詞であるが、もちろん運命論者であるバイロンは、そこにある程度の意味合いをこめていたであろう。ポリドリは、1819年に、The Vampyreを発表したが、それまでのあいだにかなり、Vampire

について研究したようである。そのことは、ポリドリがそのイントロダクションのなかで、かなり詳しく、セルビアであったとされるヴァンパイア騒ぎを取り上げていることでもわかる。<sup>60</sup>

この事件は、1732年に *London Journal* に掲載されていたものであるが、ある兵士が首の骨を折って死に、その人物が死後20-30日たってから四人の人を殺したとされて、死後40日後に掘り起こされる。すると顔のあちこちから血がしたたり、新しい爪が生え、なによりも体が全く腐敗していなかったので、人々は恐れて、心臓に杭を打ち込み、さらに念を入れてその遺体を焼いた。そして彼に殺された四人の墓、それから数カ月以内に死んだ老若17名のうち、13名の墓が暴かれたと言う。

ポリドリの *The Vampire* にはこのような研究も加わり、バイロンの断片とは多少異なるものに仕上がっている。中にはゲーテのように、これはバイロンの作品の中で最もすぐれている、<sup>61</sup>と勘違いした人が海外にまで現れる始末であった。ポリドリの *The Vampire* の主人公は、Lord Ruthvenと言い、このバイロンを彷彿とさせるLord Ruthvenはポリドリを思わせる若い友人Aubreyを連れてギリシャへ旅に出る。Lord Ruthvenは、Aubreyが愛していたIanthéという女性を彼から奪った上、殺す。当時、彼女がだれに殺されたのかは、すぐに判明せず、Aubreyは悲嘆にくれる。Lord RuthvenはAubreyをやさしく看護し、ふたたび二人は旅に出るが、二人はあるところで強盗に襲われ、Lord Ruthvenは撃たれて死ぬ。遺言で遺体は、山の上の月明かりのあたるところに置かれ、後に葬られることになっているが、戻ってみると死体が消えていた。AubreyはLord Ruthvenが死ぬ前に、遺言として、彼の悪行を一年と一日話してはいけなと申し渡されていて、それに拘束される。Aubreyはイギリスへ帰って、Lord Ruthvenが生きているばかりか、自分の妹と結婚することになっていて驚く。Aubreyの制止するのも聞かず、妹はLord Ruthvenと約束の切れる一日前に結婚し、すぐに殺されてしまうというものである。

興味深いことに、ポリドリのつけたRuthvenという名前は、バイロン家の屋敷であったNewstead Abbeyで借家人であったGrey de Ruthvyn<sup>62</sup>に由来するとも考えられるが、あるいは直接的には、1816年、バイロンたちがスイスにいるあいだに出版された、キャロライン・ラム(Caroline Lamb)がバイロンを主人公として書いた *Glenarvon* のヒーローの名Lord de Ruthvenから取られたと考えるほうが自然かもしれない。キャロライン・ラムは有名な政治家——後に首相をも務める——の妻であったが、バイロンと恋愛沙汰を起こして彼を追いかけてまわし、ついに受け容れられないとわかるや敵対心を抱き、奇異な行動に出て人々を驚かせるような人物であった。ずっと後に、ギリシャから遺体となって故国へ戻ってきたバイロンの葬送を見て正気を失ったといわれている。<sup>63</sup> キャロライン・ラムは当初、この本を(フィクションの)登場人物と実在の人物との人物対照表を添えてバイロンに献呈するつもりであったが果たさなかった。バイロンはこの *Glenarvon* の存在、そして内容をスイス滞在中、スタール夫人(Madame de Stael)から聞いた。

現代にくらべて極端に娯楽の少ない時代にあつて、バイロンは何をしても社交界の花形であり、うわさ的であつた。人々は彼の一举手一投足に注目し、社交界の多くの女性はバイロンに紹介されることを心待ちにしていたといわれている。そのような中での彼のスキャンダルを、人々は非難するだけはするが彼への関心はかえって高まるばかりという奇妙な状況をつくり出していた。バイロンとキャロラインの関係を大胆に描き、その他多くの社交界の人たちを自由に登場させた *Glenarvon* は、作家としては無名に等しかったキャロラインが書いたにも拘らず、出版と同時にベスト・セラーになった。<sup>64</sup>

フランセス・ウィルソン (Frances Wilson) の解説によると、バイロンが彼女を見捨てたことはキャロラインにとってたいへんな打撃となつたようである。キャロラインは “I lost my brain. I was bled, leeches.... To write this novel was then my sole comfort. Before I published it, I thought myself ruined, past recall...” とまで言っている。<sup>65</sup> *Glenarvon* の中では (バイロンのことを)、 “The whole country are after him... ‘it’s a rage, a fashion.’ ‘It’s a frenzy’ ... ‘a pestilence which has fallen on the land, and all, it’s my belief, because the stripling has not one Christian principle, or habit in him: he’s a heathen.’ ”<sup>66</sup> と述べ、バイロンをまるでベストでもあるかのよう描いている。ウィルソンは、

Involvement with the vampiristic Lord Glenarvon results in Lady Calantha’s [=Lady Caroline Lamb] gradual enervation, as if her lover had drained the living daylights out of her in order to maintain his own nocturnal existence: ‘My love is death,’ Glenarvon warns (*Glenarvon*, p.229).... Lamb’s is the first of many representations of Byron as a vampire...but she compounded the model of vampiristic desire with that of the Romantic sublime. For having once been kissed by the vampire the victim becomes a vampire herself, forced to leave her old life behind in order to impersonate his bloodsucking desire. Her lover, meanwhile, has moved on, having learned to ‘despise the victim of his art’ (*ibid.*, p.143)<sup>67</sup>

と述べ、バイロン自身が如何にヴァンパイア的であることを分析している。確かに多くの女性に惹き付けられて、また逆に女性を惹き付けて、その後、相手を憔悴させてしまうやり方は、世間のヴァンパイアのイメージと近いものがある。残念ながら、現在のところ、バイロンがキャロラインと実際にヴァンパイアの話をしたという証拠は残っていないが、また、このことは逆に、当時ヴァンパイア概念がかなりひろがっていたということにもなりうるであろう。つまり、キャロライン・ラムが何の無理もこじつけもなく、バイロンとヴァンパイア概念を結びつけることができるような素地が、世間にはできあがっていた

のである。

とにかくバイロンにとって、思い出したくもないキャロラインのことをこのような形で Ruthven の名前を使うことによって持ち出してきて、この作品 (*The Vampyre*) をあたかも自分 (バイロン) が書いたように見せかけたポリドリの行為は一層許しがたいものであったことは想像に難くない。

#### バイロンの死生観の変化

バイロンの *Occasional Pieces* のなかに、1812 年頃に書かれた、三つの小品があるが、これらは死について語っている。“Euthanasia” と題する詩の冒頭では、死ぬときは、静かにやってきてほしい、そしてこの世に生まれ、苦しみの中で生きるよりも、死という何もない状態が望ましい、という趣旨の虚無的なことをうたっている、

When Time, or soon or late, shall bring  
The dreamless sleep that lulls the dead,  
Oblivion! may thy languid wing  
Wave gently o'er my dying bed!

.....

'Ay, but to die, and go,' alas!  
Where all have gone, and all must go!  
To be the nothing that I was  
Ere born to life and living woe! . . .

(*Occasional Pieces*, “Euthanasia,” 11.1-4, 11.29-32)

また “And Thou art Dead, as Young and Fair” においても、失った恋人に宛てて、死は現状を凍結するという意味のことがうたわれている。

The love where Death has set his seal,  
Nor age can chill, nor rival steal,

.....

The silence of that dreamless sleep  
I envy now too much to weep....

(*Ibid.*, “And Thou art Dead, as Young and Fair”, 11.23-24, 11.32-33)

“If Some times in the Haunts of Men” は、死んだ恋人のことをひとときでも忘れるようなことがあれば、自らの楽しみを犠牲にすることもいとわないという趣旨の詩である。バイロンは、1812 年 2 月 (24 才)、上院でノッティンガムシャの機械破壊工を弁護する熱

弁をふるい有名になる。また3月には、先ほど述べたように『チャイルド・ハロルド』の第一巻と第二巻が出版され、「ある朝、目覚めたら、有名になっていた」というほどの名声を得、人生が逆境であるとは見えないときに書かれた詩である。ここにはバイロンが人生に対して抱きつづけていた懐疑的な見方、生まれるより、生まれないほうがよかったというシニカルな態度が現れている。しかしここでの矛盾は、恋愛を永遠に凍結して保ちたいという願望と、存在しないほうがましであったのにという気持の落差にあり、ここには、現実からまだ遠いものが感じられよう。つまり、バイロンは、死というものに、ある種ロマンティックなあこがれさえ抱いているが、それは現実を逃れるための手段としてである。

これらに対して、ほんの3年の間に彼は結婚、別居を経験し、加えて異母姉Augustaとの近親相姦により社交界において非難的になり、自らを国外に追放するにいたる。そしてそのことは、確実に彼の中に変化を起こした。彼の英雄的行為に対するあこがれは、たとえば、“The Prisoner of Chillon”に見られるように健在であるが、死に対する態度は、以前のものとはかなり異なってくる。たとえば*Manfred*に現れるoblivion(忘却)の追求は、死を問題にするというより、死後にoblivionが得られるかどうかを問題にしている。彼は、イギリスから離れるにあたって、身体は、離れることを決めているが、大陸に出発するという日になってぐずぐずして遅れそうになったというエピソードからも、気の進まない彼の本心がうかがい知れる。また後の何人かとの文通からは、彼がいつか故国へ帰れるかもしれないという淡い想いを抱いていたことがわかる。アンドレ・モーロワによる伝記では、バイロンは、カルヴィンの予定説のなかでも、永遠の地獄に自分は落ちる定めにあると信じていた、<sup>68</sup>という。彼は自分のことを墮落天使だと語っていた<sup>69</sup>ともいう。彼は、この自分ではどうにもならない運命を逆手にとって、なんとかこの枠組みから抜け出たいと考える。そのような気持がたとえ怪し気な力を借りても(たとえば、vampireの姿を借りても)Astarte (=Augustaと考えられる)にもう一度会いたいという気持にさせたのではないだろうか。そして、どうせ地獄におちるとわかっていながら、そのため、かえって徹底的に自我を主張するところがバイロンのためであろう。

NemesisによるAstarteの魂の召還は、絶望的な暗黒を思わせる。

...I do bear/ This punishment for both and that I shall die;/ For hitherto  
all hateful things conspire/ to bind me in existence--in a life/ Which makes  
me shrink from immortality--/ A future like the past. I cannot rest.

(*Manfred*, II, iv, ll.124-131)

この一節では、あたかもイエス・キリストが全人類の罪を一身に背負い、十字架で処刑されるように、彼が二人分の重荷を背負うことを示している。“A future like the past”そして“I cannot rest”とはまさにvampireに特徴的に見られる状態である。過去をひき

ずりながら、永遠の眠りにはつけない、というこの考え方は、もはやvampireのゴシック趣味は超越しているものの、その夜行性と負の永続性を見事に文学の中に引き継いでいるのである。

(本論は1997年11月、広島市で開催された日本バイロン協会談話会において口頭発表した内容に、加筆修正したものである。)

<sup>1</sup> Andre Maurois, *Byron*, (London: Frederick Ungar Publishing Co., 1970), p.330.

<sup>2</sup> Hobhouse, *Recollections*, I, 334-335 quoted in *His Very Self and Voice*, (ed. by Lovell) p.173.

<sup>3</sup> *Ibid.*, p.331.

<sup>4</sup> Norman Page, *A Byron Chronology* (Basingstoke, Hampshire: Macmillan Press, 1988), p.45.

<sup>5</sup> 以下の事はいわくつきの後日談になるが、Polidoriの ой の Dante Gabriel Rossettiの妻、Elizabeth Siddalは、1862年没し、ロンドンの墓地に埋葬されるが、そのとき夫のDante Gabrielはその死を悼んで妻に自作の詩を捧げて餞とした。しかし、7年後(1869年)彼は、その詩を取り戻したくなり、立会人を伴なって墓を暴くことになるが、驚いたことに妻の遺体は、死後ほとんど変わっていなかったというエピソードがのこっている。Clive Leatherdale, *Dracula--the Novel & the Legend--A Study of Bram Stoker's Gothic Masterpiece* (Wellingborough, Northamptonshire: The Aquarian Press, 1985), p.81.

<sup>6</sup> D.L.MacDonald, *Poor Polidori*, (Toronto: University of Toronto Press, 1991), p.13.

<sup>7</sup> *Ibid.*, pp.1ff.

<sup>8</sup> *Ibid.*, p.14.

<sup>9</sup> *Ibid.*, p.20.

<sup>10</sup> *Ibid.*, pp.15-16.

<sup>11</sup> *Ibid.*, p.23.

<sup>12</sup> *Ibid.*, p.41.

<sup>13</sup> *Ibid.*, p.41.

<sup>14</sup> *Ibid.*, p.42.

<sup>15</sup> *Ibid.*, p.46.

<sup>16</sup> Andre Maurois, *Byron*, p.328.

<sup>17</sup> Polidori's letter to his sister dated May 2, 1816. In *His Very Self and Voice*,--Collected Conversations of Lord Byron--, ed. by Ernest J. Lovell (New York: The MacMillan Company, 1954), p.177.

<sup>18</sup> *Ibid.*, p.339.



- <sup>19</sup> D.L.MacDonald, *Poor Polidori*, p.74他。
- <sup>20</sup> *Ibid.*, pp.85, 259.
- <sup>21</sup> *Ibid.*, p.85.
- <sup>22</sup> *Ibid.*, p.5.
- <sup>23</sup> *Ibid.*, p.235.
- <sup>24</sup> ヴァンパイアの綴りには、vampireとvampyreがあり、バイロンやポリドリの作品では後者がつかわれているが、この小論では基本的に本文では、現代の綴り字にしたがって、前者を用いる。
- <sup>25</sup> Clive Leatherdale, *Dracula--the Novel & the Legend-*, p.12.
- <sup>26</sup> *Ibid.*, p.22.
- <sup>27</sup> *Ibid.*, p.22.
- <sup>28</sup> “(God) bless you”は、6世紀のイタリアに起源を持つといわれている。“...It began by papal fiat in the sixth century, during the reign of Pope Gregory the Great. A virulent pestilence raged throughout Italy, one foreboding symptom being severe, chronic sneezing. So deadly was the plague that people died shortly after manifesting its symptoms; thus, sneezing became synonymous with imminent death.”(from *Panati's Extraordinary Origins of Everyday Things* by Charles Panati [New York: Harper & Row, Publishers, 1989], p.10.)
- <sup>29</sup> Clive Leatherdale, *Dracula*, p.26.
- <sup>30</sup> *Ibid.*, pp.91-94.
- <sup>31</sup> Raymond McNally and Radu Florescu, *In Search of Dracula*, p.103.
- <sup>32</sup> *Ibid.*, p.94.
- <sup>33</sup> *Ibid.*, p.103.
- <sup>34</sup> Sebastian Munsterの*Cosmographia*が1558年に英訳されて、そのなかに現れている。(Clive Leatherdale, *Dracula*, p.96.)
- <sup>35</sup> Clive Leatherdale, *Dracula*, p.96.
- <sup>36</sup> *Ibid.*, pp.28-29.
- <sup>37</sup> Raymond McNally and Radu Florescu, *In Search of Dracula--The History of Dracula and Vampires* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1994), p.119.
- <sup>38</sup> *Ibid.*, pp.120-121.
- <sup>39</sup> Clive Leatherdale, *Dracula*, pp.28-29.
- <sup>40</sup> *Ibid.*, p.30.
- <sup>41</sup> *Ibid.*, p.42.
- <sup>42</sup> *Ibid.*, p.44.
- <sup>43</sup> *Ibid.*, p.43. O.E.D.の“vampire”の項。
- <sup>44</sup> *Ibid.*, pp.47-48及びJames Twitchell, *The Living Death--A Study of the Vampire*

- in Romantic Literature--(Durham, N.C.: Duke University Press, 1981), p.103.
- <sup>45</sup> Norman Page, *A Byron Chronology*, pp.40-42.
- <sup>46</sup> *Lord Byron--Selected Letters and Journals*, ed. by Leslie Marchand (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1982), pp.150-151.
- <sup>47</sup> James Twitchell, *The Living Dead*, p.104.
- <sup>48</sup> Introduction to William Polidori, *The Vampyre* (Oxford: Woodstock Books, 1990), p. i 及 Nina Auerbach, *Our Vampires, Ourselves* (Chicago: The University of Chicago Press, 1995), p.48.
- <sup>49</sup> "I need not say it is not mine..." (*Lord Byron--Selected Letters and Journals*, p.195.)
- <sup>50</sup> Introduction to Polidori's *The Vampyre* (Oxford: Woodstock Books, 1990), pp. i - ii.
- <sup>51</sup> Byron's "Fragment of a Novel" in *The Penguin Book of Vampire Stories*, ed. by Alan Ryan (New York: Penguin Books USA Inc., 1987), p.2.
- <sup>52</sup> *Ibid.*, p.2.
- <sup>53</sup> D.L.MacDonald, *Poor Polidori*, p.63.
- <sup>54</sup> Mary Shelley [Reported by Thomas Moore] in *His Very Self and Voice*, ed. by Ernest J.Lovell, p.186.
- <sup>55</sup> *Ibid.*, p.128.
- <sup>56</sup> *Ibid.*, pp.29-30.
- <sup>57</sup> October 11-12, 1809: John Cam Hobhouse, in *ibid.*, p.27.
- <sup>58</sup> *His Very Self and Voice.*,--Collected Conversations of Lord Byron--, ed. by Ernest J.Lovell, p.34.
- <sup>59</sup> *The Penguin Book of Vampire Stories*, ed. by Alan Ryan, p.18.
- <sup>60</sup> Introduction to Polidori's *The Vampyre*, pp. xx-xxii.
- <sup>61</sup> James Twitchell, *The Living Dead*, p.107.
- <sup>62</sup> Lady Caroline Lamb, *Glenarvon* (London: Everyman, J.M.Dent, 1995), p.367.
- <sup>63</sup> Andr'e Maurois, *Byron*, pp.179ff and pp.554-555.
- <sup>64</sup> Lady Caroline Lamb, *Glenarvon*, p. xviii.
- <sup>65</sup> Letter to Lord Granville Leveson-Gower, in Elizabeth Jenkins, *Lady Caroline Lamb* (London: Gollancz, 1932), p.184 mentioned in the book above.
- <sup>66</sup> Lady Caroline Lamb, *Glenarvon*, pp.111-112.
- <sup>67</sup> *Ibid.*, pp. xix-xx.
- <sup>68</sup> *Ibid.*, p.259.
- <sup>69</sup> *Ibid.*, p.289.